



日本音楽教育学会ニュースレター

目次

1	日本音楽教育学会第45回大会のご案内	2
2	委員会よりお知らせ	
2-1	編集委員会	4
2-2	音楽文献目録委員会	4
3	音楽教育の窓	
3-1	ISME60周年世界大会 初めて南米大陸で開催 —ISME第31回世界大会報告—	4
3-2	伝統音楽と素直に向き合う子どもたちの現状に希望を抱いて —東京サミット「21世紀における日本音楽—未来への提言—」に参加して—	5
3-3	これからの方向性のカギとなる「創造性」研究の最先端を問う —Creativity Conference 2014に参加して—	6
3-4	〈特集〉音楽・教育・学校（1）—連載のスタートにあたって—	7
4	会員の声	
4-1	北海道・空知の音楽教育の現状	8
5	新刊紹介	
5-1	『音楽科における教師の力量形成』	9
5-2	『ノイズ／ミュージック—歴史・方法・思想 ルッソロからゼロ年代まで—』	10
5-3	<i>Journal of Creative Music Activity for Children</i> vol.2	11
6	報告	
6-1	平成26年度第2回常任理事会	11
6-2	平成26年度第1回『音楽教育実践ジャーナル』検討委員会	13
7	事務局より	14
	編集後記	

【日本音楽教育学会事務局】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206

TEL&FAX：042-381-3562 E-mail：onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 *郵便物は私書箱へ

1 日本音楽教育学会第45回大会のご案内

第45回大会実行委員会

日本音楽教育学会第45回大会が平成26(2014)年10月25日(土)及び10月26日(日)に聖心女子大学で開催されます。今大会テーマは「文化の継承と創造」。歴史の中で磨かれ、受け継がれてきた貴重な音楽的文化。その文化はまさに「今を生きる私たち自身」の営みにおいて実践され、時には変容し、その中でまた、新たな文化が生まれていきます。音楽教育に携わる者にとって欠くことのできないこの課題について、皆様との交流を通して多角的な視点から考える場になれば、と願っております。



大会テーマと関連して、大会初日の10月25日には、本学会会員、聖心女子大学の岡崎淑子学長による、「カンボジア古典舞踊の継承と創造—グローバル化時代における文化的アイデンティティの様相—」というタイトルの講演が行われます。シンポジウムでは清虚洞一絃琴宗家四代の峯岸一水氏と、アイルランド音楽家の守安功氏にご登壇いただき、フロアも交えて大会テーマについて議論を深めたいと思います。続く大会2日目(10



月26日)には、「新しい音楽文化の創造—ボーカロイドの可能性—」と題するパネルディスカッションを企画し、新たな音楽文化の創造と展開という視点から大会テーマに迫っていきます。各企画の詳細は、下記、もしくは大会プログラムをご参照ください。

第45回大会の会場、聖心女子大学は、四季折々の自然を感じさせる緑豊かなキャンパスです。また、キャンパスに一步足を踏み入ると、先進的な建物と伝統を感じさせる建物とが共存しており、本大会のテーマ「文化の継承と創造」を髣髴とさせられるのではないのでしょうか。

大会ホームページには、大会情報のほか、キャンパス写真や皆様に耳寄りな情報を随時更新していく予定です。どうぞご覧ください。

1. 実行委員会企画について

第1日目：講演「カンボジア古典舞踊の継承と創造—グローバル化時代における文化的アイデンティティの様相—」
講演者：岡崎 淑子

【講演者プロフィール】

岡崎淑子(おかざき よしこ)：専門は民族音楽学。中学高校の音楽科教員時代より多文化音楽教育に力をいれ、博士論文は“Music, Identity, and Religious Change among the Toba Batak People of North Sumatra”(UCLA, 1994)。大学では「世界音楽入門」、「民族音楽学」、「東南アジアの社会と文化」等を担当。柘植元一、塚田健一編『はじめての世界音楽』(音楽之友社、1996初版)の第5章「東南アジア」を執筆。

第1日目：シンポジウム「文化の継承と創造」

コーディネーター：水戸 博道(明治学院大学)

パネリスト：峯岸 一水(清虚洞一絃琴宗家)、守安 功(アイルランド音楽家)

【パネリストプロフィール】

峯岸一水(みねぎし いっすい)：清虚洞一絃琴宗家四代。清虚洞一絃琴流祖・徳弘太鎌の玄孫。幼少より曾祖母・宗家三代松崎一水(国選無形記録文化財保持者)より手ほどきを受ける。もとは精神修養の楽器でもあった江戸期に隆盛の一絃琴音楽の伝統を次世代に継ぐべく古典新曲の演奏会を国内外で行い、指導も行う。また舞踊・演劇など音楽以外の芸術との新しい広がりをも模索している。2009年Delphic(文化芸術オリンピック)一絃・二弦楽器部門銅賞。ACC(Asian Cultural Council)より助成を受け、2010年NYにおいて8か月、2013年台北にて3か月研修滞在。

守安功（もりやす いさお）：桐朋学園大学音楽学部古楽器科卒，同研究科修了。在学中，第10回全日本リコーダーコンクール独奏部門において入賞。また，20代の頃は，リコーダーの演奏と並行して，国指定重要無形文化財江戸里神楽若山社中囃子方としても活躍する。今は亡き名人たちを含む，アイルランドのさまざまな地方の演奏家たちから教えを受け，その活動は，ドキュメンタリー番組にもまとめられ，2002年，アイルランド国営放送でも放映された。アイルランドの音楽，ダンス，文化，歴史に関する著書，訳書8冊。

第2日目：パネルディスカッション「新しい音楽文化の創造—ボーカロイドの可能性—」

企画：大会実行委員会，齊藤 忠彦（信州大学）

パネリスト：黒田 亜津（ボーカロイドP），菊地 俊公（武蔵野美術大学），
剣持 秀紀（ヤマハ株式会社），杉江 淑子（滋賀大学）

【趣旨】

これまでの音楽文化の変遷をみると，たとえば，蓄音機，レコード，CD，DVD，インターネットなどのメディアの登場により，音楽鑑賞のスタイルが大きく変わってきた。このように新しいメディアの登場は，新しい音楽文化の誕生のトリガーとなり，それを定着させるのは新しいメディアに敏感な若者たちであることが多い。今回のパネルディスカッションでは，ボーカロイドの登場により，音楽文化はどのように変容しようとしているのか，そして，どのように変容することが望ましいのか，さらには，ボーカロイドの学校音楽教育への参入の可能性について，ボーカロイドのデモンストレーションを含めながら，4名のパネリストとともに討論する。

2. 院生フォーラム参加者募集！

大学院生によるポスターセッションを開催いたします。今年は，多くの方が参加しやすい場所を院生フォーラム用に確保し，ポスター掲示時間を長くしました。研究に関する活発な意見交換がなされると同時に，全国の院生同士の交流の場となることを願っております。音，音楽，音楽教育をめぐるさまざまな発表をお寄せください。多くの方々の参加をお待ちしております。

お申し込みの締め切りは9月19日（金）となっております。参加をご希望の方は大会HPの院生フォーラムサイト，もしくはニュースレター56号をご確認の上，お申し込みください。

3. アクセスについて

会場の聖心女子大学最寄駅は以下の通りです。

- 東京メトロ日比谷線「広尾駅」2番「天現寺橋（聖心女子大学）方面」出口より，広尾商店街（散歩通り）を通り徒歩 約3分
- JR 渋谷駅東口または恵比寿駅より都バス「日赤医療センター前」行乗車 終点「日赤医療センター前」下車 約3分
- JR 品川駅より都バス「新宿駅西口」行乗車 「広尾橋」下車 約4分
- JR 目黒駅より都バス「千駄ヶ谷駅」，「新橋駅」行乗車 「広尾橋」下車 約4分

4. 昼食について

お弁当をお申込みいただくか，学食・周辺飲食店をご利用ください。学食は，25日（土）11:30～13:20のみ営業しております。大学内に売店はございませんので，予めご了承ください。なお，当日受付にて周辺飲食店の案内マップをご用意しております。

5. その他

10月25日（土），聖心女子大学では授業が行われております。ご理解とご配慮の程よろしくお願ひ申し上げます。

（村上康子・長井覚子）

～大会情報は，本誌14頁，もしくは大会HPもあわせてご覧ください！～

大会HP ☞ <https://sites.google.com/site/ongakukyoiku/>

大会HP 院生フォーラムサイト ☞ <https://sites.google.com/site/ongakukyoiku/6>

2 委員会よりお知らせ

2-1 編集委員会

編集委員会委員長 永岡 都

『音楽教育実践ジャーナル』が今年で12年目を迎えました。創刊以来「企画して編集する学術誌」として毎号、特集テーマを掲げ、音楽教育を取り巻く様々なトピックやトレンドについて話題を提供し、会員の皆様と情報共有をしております。あらためてその意義の大きさを振り返ると共に、12年を一つの区切りとして「実践ジャーナル」の名にふさわしい誌面とは何か、再考する時機に来ているかもしれません。

編集委員会としては、これからも多くの会員の方に活発に投稿していただくために、様々な工夫が必要であると感じています。たとえば、特集テーマをお知らせする時期をもう少し早めて、投稿に向けての準備期間を延長することも視野に入れていきます。『音楽教育実践ジャーナル』の今後の方向については、またニュースレターや学会ホームページを通して、その都度、情報発信していきたいと思っております。

さて、編集委員会では、『音楽教育実践ジャーナル』vol.13 no.1（通巻25号、2015年8月発行）の特集テーマを「これまでに音楽科が果たしてきた役割、これからの音楽科が担うべき役割」とし、広く原稿を募集いたします。締め切りは2015年2月15日です。締切日の変更により、昨年より1か月募集期間が短くなっておりますが、移行期間ということで、何卒ご了解いただきますようお願いいたします。また、特集投稿、自由投稿の別に関わりなく、投稿を希望される方は「論文」「報告」「討論」「提案」など原稿の種別をふまえて、ご執筆くださるようお願いいたします。詳しくは『音楽教育実践ジャーナル』vol.12 no.1巻末の原稿募集文、及び「音楽教育実践ジャーナル投稿規定」をご覧ください。

2-2 音楽文献目録委員会

音楽文献目録委員会 木間 英子

2014年4月からの消費税変更に伴い、『音楽文献目録』の価格表示、送料を下記のように変更いたします。

- ・価格表示：従来の「定価3,500円（本体3,333円+税167円）」から「本体価格3,333円+税」に変更
- ・送料：郵便・宅配便の料金価格の改定により、実費+手数料（40円）に変更
- ・書店経由で購入の場合：「本体価格3,333円+税267円」-20%（720円）=2,880円+送料

3 音楽教育の窓

3-1 ISME60周年世界大会 初めて南米大陸で開催

—ISME第31回世界大会報告（2014年7月20-25日、ブラジル、真冬のポルトアレグレ）—

明星大学 阪井 恵

Descobrimos o Brasil!（ブラジルを発見!）というブラポル語の入門書を片手にブラジルの土を踏んだが、6泊だけの滞在で、何をどう発見したのか語るのには難しい。肌で感じたのは混沌と活気である。あらゆる人種の人々が自分はネイティブ・ブラジリアンだと言い、会話が通じようが通じまいがよくしゃべる。陽気で親切である。宿泊したホテルは改装中で、使えるエレベーターやレストランの場所が日によって変わる。3週間前、FIFAの会場に使われたスタジアムに行ってみれば、なんと、そこはまだ工事中(!)なのだった。

大会プログラムには、口頭発表400、ポスター発表290、ワークショップ30、シンポジウム20が掲載されているも、全体の3割以上がキャンセルされ、スケジュール変更が多かった。人数の上では南米の人が6割方で、アジア人に関しては参加が非常に少なかった。

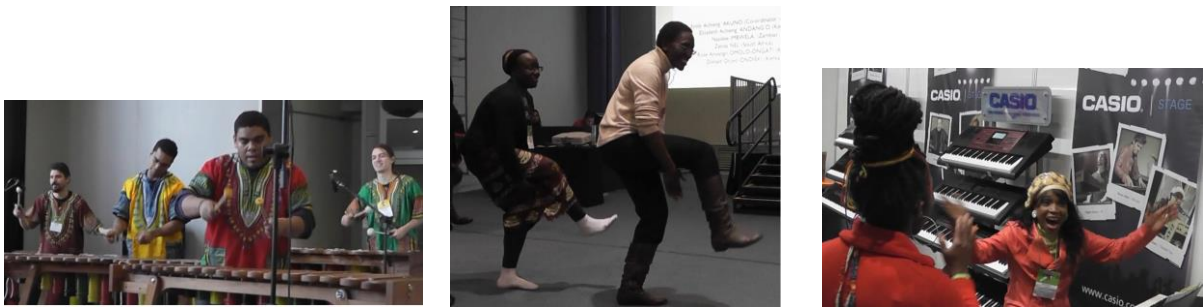
今大会のテーマはListening to the musical diversity of the worldである。では、たくさん目や耳に新しい音楽を見聞したかということ、実は全然そうではない。たとえばBS、CSの

番組で知った音楽。YouTube を通じて、触れたことのあるパフォーマンス。日本在住あるいは来日したアーティストと接して経験した音楽。そして日本人の才能豊かなアーティスト達が次々に創り出す音楽。日本に暮らせば、今や形あるモノだけではなく、音楽だってほとんど何でも見聞することができるようになってきている。このことをひしひしと感じた。

しかし、マイッタというほど見せつけられたことがある。それは、大会会場のあちらこちら、そこかしこのコーナーから次々と湧き上がって来る、素朴で単純でパワフルで楽しい音楽である。楽器店のブースでは展示品を使い、誰かが弾いたり歌ったりし始める。するとどんどん人だかりができて大アンサンブルに発展。階段に座って鍋を叩いている人が居るかと思うと、ここにも人が集まり、声とボディパで盛り上がる。ランチコンサートでは、パフォーマーに負けず劣らず聴衆が歌い、手足拍子を入れ、掛け声を張り上げる。この人達の心身を満たしている歌とリズムが、ほんの少しのきっかけで怒濤のように溢れる感じだ。単純な旋律、イキの良いリズム、力強い声と踊りに、思わず巻き込まれてしまう。このように、音楽で人を元気にする振る舞いと、彼らがキャッチフレーズのように繰り返す Children need music! Music encourages children! という強い思いは、最近の私に（本当は持っているのに）欠けているものだ。そしてもしかすると、私たちの学会にも……。ぜひ取り戻そうではありませんか!!!

音楽の学習方法、表現手段についても、新旧世代（？）の違いがグローバルに進行していることを実感する。ガムランとエレキギターのアンサンブル（マレーシア）、アプリの利用に徹してつくるガレージミュージック（アメリカ）などの実践事例が、私には興味深かった。

大会事務局長の Dr. クリステイナ伊藤には、ビザ取得、治安問題、発表用機器の相談などでお世話になり、日系人の素晴らしい仕事ぶりに接した。話題は尽きないが、紙幅が尽きて残念。



3-2 伝統音楽と素直に向き合う子どもたちの現状に希望を抱いて

—東京サミット「21世紀における日本音楽—未来への提言—」に参加して—

国立市立国立第六小学校 山内 雅子

本サミットは、主催:コロンビア大学中世日本研究所、共催:国際文化会館、後援:東芝国際交流財団、交際交流基金、中世日本研究財団で、2014年6月15日(日)に、東京・六本木の国際交流会館で開かれた。

本サミットの開催の目的は、日本音楽を再活性化し、よりグローバルなものにしていくために、日本音楽に関わって多方面で活動する人達が一同に会し、今できることを取り組んでいくための具体的なアクションプランや見取り図を描くことである。中世日本研究所所長のバーバラ・ルーシュ氏を座長として、新日鉄住金文化財団紀尾井ホール常務理事の町田龍一氏、武蔵野音楽大学教授の薦田治子氏、邦楽ジャーナル編集長の田中隆文氏、日本伝統文化振興財団会長の藤本章氏がまとめ役となり、以下の4つの戦略チームで、10:30~15:30まで、部会討論がなされた。

A 小学校・中学校および高等学校における日本音楽および日本文化の教育改革(町田チーム)

課題:教育現場における日本文化・日本音楽の活性化のための具体的な手だて

メンバー:カーティス・パターソン(横浜インターナショナルスクール)、小野木豊昭(古典空間)、長瀬淑子(日本音楽国際交流会)、茅原芳男(教育者)、石森康雄(研究者)、山内雅子(国立第六小学校)

B 日本の音楽大学における日本音楽の専門家養成と教員養成の強化(薦田チーム)

課題:邦楽と洋楽のバランスの調整、邦楽専攻生の増加、教員採用試験科目に和楽器実技、伝統的歌唱。

メンバー:深海さとみ(東京藝術大学)、塚原康子(東京藝術大学)、加藤富美子(東京音楽大)

学), 大熊信彦 (群馬県総合教育センター), 伊野義博 (新潟大学), 澤田篤子 (洗足学園音楽大学)

C メディア：一般聴衆への責務と音楽専門家への責務、およびグローバル市場に向けた日本音楽の記録と提供の仕方 (田中チーム)

課題：和楽器や日本音楽の楽しさを日本の一般聴衆, 世界の聴衆に向けて発信できるメディア

メンバー：川口裕司 (日本伝統文化振興財団理事長), 真鍋聖一 (東京新聞放送芸能部記者), 高尾宏 (伝統文化新聞編集長), 奈良部和美 (日本経済新聞記事審査部記者), 村尚也 (執筆・演出・プロデューサー), 今藤政太郎 (長唄三味線演奏家), 藤山晃太郎 (プロデューサー)

D 各種組織, アカデミア, 財団, 劇場のパートナーシップ・戦略的協働による持続可能な成長 (藤本チーム)

課題：個別の活動を効率的・効果的に協力して, 長期的に持続させて影響力をもつ取組としていく

メンバー：時田アリソン (京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター長), 大野壽子 (日本伝統文化振興財団専務理事), 酒井昭義 (全国邦楽器商工業組合連合会会長), 白井純 (東芝国際交流財団), 藤本玲 (全国邦楽合奏協会理事長), 勅使河原季里 (草月アートプロジェクトディレクター・北米事務局長)

この後, 15:50~16:50 まで, 分科会リーダーからの報告と聴衆からの質疑応答, 16:50~17:30 までがフリーコミュニケーション, その後レセプションが開かれた。全体会には大学関係者・邦楽関係者等 50 名ほどがフロアに参加したが, 作曲家から「メンバーの中には作曲家も入るべきではないか」という意見も出され, 「伝統」は過去のものではなく, 日々創造されていくものであるとの認識を新たにした。

私はチーム A の討論に参加したが, 「現代の子どもたちは日本文化や伝統音楽に対して, 極めて素直に, 前向きに関わっていくことができる」ということを全員一致で確認しあった。その子どもたちを育てていくための教材開発, 指導法の研究, 指導者の養成, 学校教育現場と教員養成大学の連携, 演奏家の養成他, 学校と教育委員会, 出版社, 作曲家, 演奏家, メディアの方々, 財団の方々等が縦に横につながりながら, 希望を抱きつつ取り組んでいきたい。次回は, 更なるメンバーの充実と, ABCD 合同戦略チームでの話し合いも希望したい。

3-3 これからの方向性のカギとなる「創造性」研究の最先端を問う —Creativity Conference 2014 に参加して—

玉川大学 高須 一

音楽だけでなく, 幅広い研究分野から創造性について考える国際会議 (Creativity Conference) 第 4 回大会 “Reframing Creativity for the Needs of the Present and the Future” が, 6 月 28・29 日の両日にわたって日本女子大学目白キャンパスで開催された。この会議は, 2008 年のミュンヘン大学での “Creativity and Talent Development Conference” を第 1 回とし, その後隔年でドイツ, シンガポールで開催され, 今年は第 4 回目となる。イギリス, アメリカ, デンマーク, ポーランド, 香港など欧米やアジアの 8 か国からの参加者を得て, 講演, パネル・ディスカッション, ペーパー・プレゼンテーション, ポスター・セッションの形で行われ, 活発な議論が行われた。Conference Organizing Committee は, シンガポールの Ai-Girl



Tan 氏 (Nanyang Technological University), 坪能由紀子氏 (日本女子大学), 大家まゆみ氏 (東京女子大学) であった。なお, 筆者は都合により初日の午後から参加したことをお断りしておきたい。

発表内容は, 音楽教育学, 教育学 (幼児教育から高等教育まで), 心理学, 経営学, メディア論など多岐にわたった。基調講演やパネル・ディスカッションでは, いろいろな専門分野を切り口としながら, 「創造性とは何か」という, 本会議の本来の目的にも肉薄するものであった。

音楽教育学では, まず, 坪能氏が基調講演において, 音楽を事例にしつつ, 創造性を普遍性 (universality), 共通性 (Commonality), 個別性 (Locality) という 3 つのレベルで整理し, 具体的な事例を挙げることで本会議の方向性を明確にした。また, 今田匡彦氏 (弘前大学)

が芸術教育を「形式」と「内容」とに分けて考えることを、学生による紙だけの音楽創作を事例に用いて具体的に提案した。

教育学では、アメリカの David Yun Dai 氏が、アメリカにおける創造性研究の現状と教育における応用について述べるとともに、創造性育成に関する芸術教育の成果が「数字で表せない」ながらも「人間の教育にとって不可欠な能力」を育てるものである一方、「数字で表しやすく」経済効果を上げることにつながる数学教育や言語教育に比して軽視されている現状を報告し、我が国の文部科学省が次期学習指導要領改訂の根拠として公にしている、世界的に話題となっている「21世紀型スキル」にもふれ、そこで強調されている「創造性の重要性」が経済原理の観念に基づくものであり、アセスメントを念頭に措定されていることを明確にした。この発表は、フロアに強い衝撃を与え、本会議で最も議論を巻き起こしたものであったと言える。

各講演及びパネル・ディスカッションでは、本会議の主要メンバーが発表を行ったためか、創造性についての最新の研究を具体的な事例を紹介しながら様々な角度から論じられた。特に、Ai-Girl Tan 氏による「現代社会における人々のニーズに対する総合的な創造性」の発表では、21世紀型スキルに言及しつつ、今後の社会において社会的情動的学習が重要になることを、・幼児期の創造性育成、・すべての人々に解放された（含んだ）社会を創造すること、・在宅高齢者（終末期のケア）の3点から論じたことは特筆に値しよう。

最新の創造性研究としては、Yuh-cheng Fan 氏による Torrance, Feldman, Sayer のモデルの提示と、カリキュラムにおける3モデルの統合の紹介や、Evelyna Liang Kan 氏による終末期の回想治療の紹介の中で、現在、創造性のフェイズとして一般化しつつある、「大きな創造性 Big-C」「小さな創造性 Little-C」「ミニ創造性 Mini-C」「専門家の創造性 Pro-C」がコンパクトに紹介されたことは、インフォーマティブな内容としては参加者に有難いものであったように思う。

最後に、日本女子大学、東京藝術大学、東京学芸大学の若手研究者の多くが、ペーパー・プレゼンテーションやポスター・セッションで意欲的な発表を行ったことは、今後の音楽教育学界の発展に明るい展望をもたらしてくれたものと強く感じたことを付記しておきたい。



3-4 〈特集〉音楽・教育・学校（1）—連載のスタートにあたって—

広報委員会

さわやかな風がフワッと室内に入ってくるそんな感覚でニュースレターに窓をあけたい、窓をあければどこまでも続く広い青空が見える、窓をあければ満点の星たちが語りかけてくる、そんな「音楽教育の窓」をいくつも開きたい。ちょうど今年の ISME 大会は地球の反対側のブラジルで開催され、わくわくするようなご報告をいただきました。また、国内で開催された研究会からも、世界各地と日本をつなぐ発信を多数ご報告いただきました。それらの報告に心ときめかせ、窓から広がる世界へ思いを馳せながら「音楽・教育・学校」について再考したい、という思いで〈特集〉での連載の窓をオープンしました。小さなコラムですが、さまざまな方にリレーをしていただきながら、会員の皆様からのご意見も交え、ともに考えていくことができればと思います。

そういえば、最近、いつになく時の経過とともに歴史を振り返ろうとする数字によく出遭います。たとえば、第一次世界大戦から今年で100年となる歴史から学ぶことが提唱されたり、被爆70周年（昭和20年の原爆投下から来年で70年）事業が広島・長崎で展開されたりしています。今年を中心にその前後数年間でそうした節目の年にあたる、ということのようですが、「戦後70年」と題した朝日新聞の記事には、「数字に格段の意味はない。だが振り返るには相応に長い旅路であり、今とこれからを考えて見る頃合いではあるだろう。焦土と化した日本を記憶する世代も少なくなった。『戦後80年』を無事に迎えられるのかどうか、何かと雲行き怪しい時勢でもある」（福田宏樹・文 2014.5.12 夕刊）と書かれています。音楽については、ラジオ放送や記念館等で唱歌100年という企画が組まれましたが（『尋常小学唱歌』第6学年発行から今年で100年）、戦後の新教育から70年目を目前にし、この先「音楽科教育80年」にどのように向かっていくのかを考えれば、今は一つの節目の時期であるとも言えましょう。

近代学校制度の成立から140年、その前半を唱歌科と芸能科音楽、後半を音楽科として存続

してきた学校での音楽教育は、そのつど国策に翻弄されてきました。とはいえ、異なる方向も存在するなかで、当時の音楽教育を形づくったのはその時々の音楽教育関係者たちです。たとえば、昭和初期においても、5音よりも7音の方が進化した音階である、西洋音楽の方が完全に人格修養にも役立つ、という主張をする教師がいる一方で、これまでの音楽教育、政府の政策は誤っていた、伊澤修二の時代はあれでよかったが今はそうではない、と、日本の音楽文化を俯瞰的に捉えて批判をする声もありました。また、唱歌教育から芸能科音楽の時代を経て、戦後には「国楽」という言葉さえほとんど聞かれなくなっていました。唱歌教育がどのような歩みをたどってきたか、戦後の教育がそこからどう展開されてきたのかについては、これまでも多くの研究がなされてきましたが、戦前の国民国家形成や帝国主義思想、戦後の民主主義教育、いずれにおいても、音楽科の存立基盤はかならずしも盤石なものであったとは言えないように思います。

歴史には、目に見える制度改革等にばっさりと変えられてしまう側面と、その時には見えなけれど、あとから振り返ると内部から変化していたことがわかる側面があると思います。後者については、子どもたちの成長や自己実現を可能にしていくために学校の音楽教育はどうあるべきか、その時々の音楽教育関係者が精一杯の知見を出し合うことによって変えていくこともできる部分であり、さらに言えば、そこから、前者の変革を支えていくこともできるでしょう。「文化は今まさに『今を生きる私たち自身』の営みにおいて実践され、時には変容し、その中でまた、新たな文化が生まれて」いくことを捉えた第45回大会テーマ（本誌2頁）とも響き合うこの問題について、連載を通して真剣に模索したいと考えます。（権藤敦子）

4 会員の声

4-1 北海道・空知の音楽教育の現状

北海道岩見沢市立明成中学校 野村 勝紀

空知は北海道の中央部に位置し、南の札幌、北の旭川をつなぐように南北約130kmに広がっています。24市町で構成され、石炭で賑わった時代もありました。その中心市である岩見沢市は空知の中で南にあり、近年の豪雪被害の様子はたびたび報道でも取り上げられました。空知全体では人口の減少は続いており、それに応じて学校規模も小さくなっています。また、ここ数年で小中学校の閉校による統合が急速に進んでいます。

空知の音楽教育の現状について紹介します。この地域の音楽科を担当している教員が中心となり研究団体「全空知音楽教育連盟」を組織しています。この組織は昭和25年に発足した「中空知音楽教科研究会」を母体とし、昭和35年に現在の名称に変え今日に至っています。現在は小中学校の教員約40名が所属し、年1回の研究大会をはじめ、実践交流や実技講習などを開催し実践力を磨いています。

空知の先生方の悩みとして、音楽の授業が満足にできていないということがよく聞かれます。授業内容や方法はもちろんですが、それ以上に業務多忙のため授業準備の時間を確保することが困難であるという意味合いが強いです。その背景には学校規模の縮小に伴う教職員配置数の削減があります。専門の教員がいない教科もあり、受け持ち時数の少ない音楽科教員がそれらの教科を担当せざるをえない傾向にあります。免許外担当教科として複数の教科を受け持ち、慣れない教科の教材研究・評価業務に多くの時間を費やすことは時間的にも精神的にもかなりの負担です。その結果、必然的に音楽の準備はおろそかとなり、音楽の授業改善まで手が回らないのが実情です。私自身も授業としてはまったく未知の分野である家庭科や美術を担当していたこともありました。さらに、閉校による影響は人事面でも困難な状況をつくっています。学校は減っても音楽教員の数は変わらないので、音楽教員が規模に見合わず一つの学校に複数集まってしまう事態も発生しています。その場合、どちらかの音楽教員が特別支援学級を担当するなど免許外教科と同様に慣れない仕事をせざるをえないケースも少なくありません。このような悩ましい状況は私達空知ではもは

平成27年度
第57回北海道音楽教育研究大会空知岩見沢大会
わかる楽しさ できるよろこび わからあう感動
～思いを豊かせあう音楽の学びをめざして～
2015/11/6【金】
岩見沢市民会館・文化センター「まなみーる」
（空知支庁岩見沢市）
（高校会場は未定）

◆◆大会日程(予定)◆◆
8:40～9:20 受付
9:20～9:50 開会行事
9:50～12:00 学校説明・分科会
●中学校2 ●高学1 ●中学校2 ●高学1
12:00～13:00 昼食・休憩・移動
13:00～13:40 北原教諭会 再発祥総会
13:40～14:00 参加者ワークショップ 記念講演
14:00～16:30 閉会行事
16:00～20:00 レセプション (会場:「中校前」岩見沢市4番東2丁目)

主催:北海道音楽教育連盟 共催:北海道高等学校音楽教育研究会 後
 援:岩見沢市 実行:全空知音楽教科研究会 実行委員会 事務局 事務局
 事務局所在地:岩見沢市立明成中学校校舎 2階 202号室 TEL:0126-45-2784

や常態化しており、北海道全体でも札幌を除くほとんどの地域で見られるようです。

そのような状況の中わずかな持ち時数で充実した音楽教育を実践するため、空知では横のつながりを大切にしながら研究活動を続けてきました。平成27年11月6日には第57回北海道音楽教育研究大会空知岩見沢大会を岩見沢市民会館「まなみーる」で開催いたします。この研究大会は北海道音楽教育連盟が主催するもので、当連盟としては6年ぶりの主管開催となります。今求められている「思いを持って表現したり味わって聴いたりする力の育成」に焦点を当て、音楽の学習場面で見られるさまざまな音や言葉の響きあい（かかわりあい）を通して音楽の楽しさを学ぶことのできる授業を目指しています。日常の私達の実践をご覧いただき、ご助言を賜りたいと存じます。また、本稿で紹介したような状況を抱えながら実践されている声もお聴かせいただければ幸いです。

5 新刊紹介

5-1 『音楽科における教師の力量形成』

佛教大学 高見 仁志



本書のテーマは、タイトルが示すとおり音楽科における教師論です。長い間、私は音楽教育の先行研究の中に教師論、すなわち教師そのものに焦点をあてた研究が少ないことに疑問を抱いていました。なぜなら、とりわけ音楽科では（他教科にもいえることではあります）、教師の力量によって授業の成果が左右されることを体験的に知っていたからです。

このような疑問を抱く中、本書中にも示した以下の指摘に出会いました。

「（音楽科では）とくに、授業における教育内容や教材レベルの問題に焦点をあてて行われたもの（研究）が多い。この背後には、教育内容、教材の良し悪しが授業の成立を左右するという、音楽科に伝統的な授業観を見てとれる。」（括弧内筆者）^{注1)}

この言葉は、「音楽科では教育内容あるいは教材となる音楽それ自体がおもしろく興味関心のまとなり、それを扱う教師自身が対象となるような研究がこれまで少なかった」といった解釈を成立させ、私を音楽科における教師研究へ誘う端緒となりました。研究を進め

るにあたっては、二つの観点を設定しました。第一に「音楽科授業における教師の思考の観点」、第二に「音楽科における教師の成長過程の観点」です。これらに焦点をあてた教師の力量形成研究は、学術的に意義は認められているものの、音楽科においては先例の少ないものでした。そこで、ささやかな内容ではありますが、上記二点を論考の中核に据えた本書を刊行することとしました。皆様より、読後のご指導など賜ることができましたら望外の喜びです。

注1) 八木正一 (1991) 「音楽の授業における教師の意思決定に関する一考察」『埼玉大学紀要〔教育学部〕』第40巻, 第1号, p. 43.

〈目次〉

序 章 研究の課題と方法

第Ⅰ部 音楽科における教師の力量形成に関する基礎理論の探究

第1章 「教師の力量形成」とは何か

第2章 音楽科授業における教師の思考探究の基礎理論

第3章 音楽科における教職経験探究の基礎理論

第Ⅱ部 音楽科授業に表れる教師の力量に関する事例研究

第4章 音楽科授業における教授行為

第5章 音楽科授業における教師の思考様式（1）

——「状況把握」としての思考

第6章 音楽科授業における教師の思考様式（2）

——「判断」「選択」としての思考

第Ⅲ部 音楽科における教師の力量形成過程に関する事例研究

第7章 音楽科における新人教師の力量形成過程

第8章 新人教師の着眼点に見る音楽科教員養成の方向性
 第9章 音楽科における熟練教師の力量形成過程
 終章 研究の総括と今後の課題
 文献目録
 あとがき
 索引

高見仁志著 ミネルヴァ書房
 2014年4月10日発行, 全228頁, 本体5,000円+税
 ISBN 9784623070114

5-2 『ノイズ／ミュージック—歴史・方法・思想 ルッソロからゼロ年代まで—』

神戸大学 若尾 裕



ノイズは音楽の大敵だ。音楽メディアからは音楽以外のノイズは極力排除されねばならない。そのために人類は壮烈な闘いを繰り広げ、ノイズの少ない回路や装置の開発に精力を傾けてきた。そしてデジタル技術にまでたどり着き、ノイズをめぐる戦いには決着が付いたかのように思われた。だがしかし、それをあざ笑うがごとく、デジタル・ノイズなる、それまでのわれわれの世界には存在しなかったものが出現する。どこまでいっても人類の敵、ノイズは忌まわしく付きまとう。これはなんだか現代社会の過度の無菌志向に似ていなくもない。

だがノイズはほんとうに人類の敵なのだろうか？ 音楽の歴史をたどると、そこには音楽とノイズは反目しあいながらも協力し合う、絶えざる複雑な関係を読み解くことができよう。無関心な貴族たちの談笑のなかで演奏されていたモーツァルトの交響曲も、19世紀なかばになると静かに聴くようもとめられる。壁で守られた静かな音楽会場が作られ、マナーができあがり始めると、こんどは皮肉なことに、

シンバルや太鼓やカウベルやウィンドマシーンなどの鳴物がオーケストラに導入されるようになる。20世紀にもなるとロックやポップでは声を出し踊りながら音楽は楽しめるようになる。音楽会場は再び喧噪の場となるのである。ひとびとは徐々に不協和音やノイズに慣れ始め、初演時には殴り合いのけんかまでであった「春の祭典」もいまでは違和感なく聞かれるようになる。最近の特記すべき事件では、NHKの朝ドラの音楽で有名になった音楽家の大友良英がテレビやラジオでノイズ・ミュージックを自ら奏で紹介して人々の耳目を引いたことがあげられる。おそらくノイズ・ミュージックがお茶の間で鳴り響くのは人類史上初めてのことで、画期的な事件と言わねばならないだろう。おそろべしポストモダン・ジャパン。

ノイズと音楽の切っても切れない関係は、音楽教育においても当然有効でなければならない。音楽教育の歴史とは、実は子どもとノイズと音楽の複雑な三つ巴の関係の歴史なのだ。子どもという愛すべきノイズは、オルフやコダイやダルクローズなどのおとなたちによって、即興という自発的な表現として合理化され、音楽教育のなかに水路づけられる。もう少し後、マリー・シェーファーやジョン・ペインターらは、サウンドスケープや創造的音楽づくりという異なる形でノイズを導入する。こうして子どもたちは、ある意味、ノイズをたてることが公認されるようになった。

もちろんこの本は、いわゆるノイズ・ミュージックと呼ばれるものの解説本として十分な知識や情報も提供してくれる。だが、私から見たこの本の最大のおもしろさは、現代音楽だけではなく、パンク、インダストリアル、ロック、プログレ、即興、サウンド・アート、電子音楽などほぼノイズに関係した音楽全域を横断したそのスコープの広大さにあるだろう。ジョン・ケージとセックス・ピストルズ、ルイジ・ルッソロとジミ・ヘンドリクスをいっしょの舞台に立たせた本は他にはない。

ポール・ヘガティ著（若尾裕、嶋田久美訳）みすず書房
 2014年4月25日発行, 全432頁, 5,616円（税込）
 ISBN 978-4622078173

5-3 Journal of Creative Music Activity for Children vol.2

—特集 日本における創造的な音楽活動の開拓者たち—

和洋女子大学 駒 久美子

Institute of Creative Music Activity for Children (新しい音楽教育を考える会) は1990年代はじめに発足し、坪能由紀子を中心として活動を続けてきた研究会です。音楽づくりワークショップを企画したり、新しい音楽づくりの方法を開発したり、音楽づくりに関する共同研究を行ったりしてきました。2012年7月には、この研究会の研究誌として創刊号 *The Wind from the East : Proposals for Creative Music Activity by Young Musicians From East Asian countries* を発行しました。この研究誌は、原則として創造的な音楽活動に関わる学術論文、またはワークショップ案によって構成されており、これだけ創造的な音楽活動に特化したジャーナルは、国内外を探しても初めての試みではないでしょうか。

ここでは、第2号に掲載された論文のタイトルをご紹介します。

■特集：日本における創造的な音楽活動の開拓者たち

1. 島崎篤子：日本における創造的な音楽学習の導入期—同時代の証人の1人として—
2. 駒久美子：雑誌『幼児の教育』にみる幼児音楽教育の創造的パイオニアたち—戦後1946年から2013年秋までを通して—
3. 長尾智絵：「音の作文」と呼ばれた作曲指導法—絶対音感教育から出発した一宮道子の実践が示すもの—
4. 権藤敦子：民謡としての「わらべうた」と創造的な音楽活動の関連性—高野辰之『民謡・童謡論』(1929)をてがかりとして—
5. 甲斐万里子：安田寛、幼児の内面に着目した創造的音楽活動の即興的展開—『子どものための音あそび集』とワークショップの分析を通して—
6. 木下和彦：山下洋輔の三作の絵本における即興の意味

■他教科からの提言—「即興的な表現」は国語でも！

川端有子：批評的、創造的行為としてのパロディ—大学の授業実践と、国語教育への応用に向けて—

■インタビュー

1. 作曲家・増本伎共子さんにきく～私が受けた一宮道子の音楽教育～ 聞き手：長尾智絵
2. 山本文茂さんにきく～音楽の意味とは？音楽科教育の意味とは？～聞き手：坪能由紀子

本研究誌をご希望の方は、Institute of Creative music Activity for Children (新しい音楽教育を考える会) tsubonou@fc.jwu.ac.jp までお問い合わせください。

Institute of Creative Music Activity for Children (新しい音楽教育を考える会)

2014年3月31日発行、全128頁

ISSN 2187-2023



6 報告

6-1 平成26年度第2回常任理事会

場 所：立教大学16号館第2会議室

日 時：平成26年7月27日(日)14:00～16:30

出席者：小川、本多、北山、権藤(記録)、佐野、杉江、中地、水戸、三村

小川会長の挨拶に続き、本多事務局長より平成26年5月11日以降の会務報告がなされた。

【会務報告】〈平成26年5月11日以降〉

- | | |
|-------|------------------------------|
| 5月11日 | 平成26年度第1回編集委員会(立教大学) |
| | 平成26年度第1回常任理事会・理事会(立教大学) |
| 6月22日 | 第45回大会発表申込締切 |
| 6月30日 | 『音楽教育学』第44-1号 ニュースレター第56号 発送 |
| 7月6日 | 第1回音楽教育実践ジャーナル検討委員会(聖心女子大学) |
| 7月26日 | 第2回常任理事会(立教大学) |

【審議事項】

1. 平成 26 年度補正予算, 平成 27 年度予算について (杉江・佐野)

第 1 回理事会での修正点および 6 月 30 日現在の会員数による変更をふまえた両予算案が提案され, 検討の結果承認された。

2. 第 45 回大会について (報告も含む) ▶1, 2 頁も参照

- (1) 大会実行委員会 (水戸) より大会要項および対面の委員会予定等準備状況が報告された。あわせて, 発表 (8 会場) と院生フォーラム会場について確認された。本年度はポスターやチラシ等は作成せず, 冊子もシンプルな装丁とした。
- (2) 企画担当理事 (加藤→本多) よりスケジュールおよびプログラム, 常任理事会企画について報告を受けて確認し, 継続課題についてはわかりやすく (2) の表示を加えた。
- (3) 事務局 (本多) より, 共同企画 9 件, 口頭発表 101 件であることが報告された。また, 大会における表記上の原則を確認し, 処理できる範囲での柔軟な対応をするための改善案が承認された。

3. 『音楽教育学』投稿規定の修正について (永岡→三村)

現行の投稿申込書に即して下記投稿規定の文言の修正が提案され, 承認された。

IV 原稿の送付

3. ウ「欧文題目」の項を削除。

5. ただし, 「研究報告」にあつては, かならずしも, 英文題目, 英文要旨, 英語のキーワードを必要としない。(下線部追加)
エ「英文タイトル」を「英文題目」に修正。

4. 音楽教育実践ジャーナル検討委員会から (水戸・三村)

7 月 6 日に開催された委員会の報告書 (答申) を受けて, 答申に対する常任理事会での意見を検討・吟味した。その結果, それらの意見にもとづいて会長から改めて今後の方針を出すことになった。

5. 教科音楽の PR について (小川)

その概要と方向性について, 現在執筆中の PR のための資料集の進捗状況を中心に報告を受けるとともに, 会長諮問プロジェクトについて, 今後の活動についての意見交換を行った。資料集は, 「1 これまで教科音楽が果たしてきた役割 (とりわけ文化創造に果たした役割) と, 「2 21 世紀型スキルの育成に向けて」の 5 項目にわたって, 学会のこれまでの成果と現在取り組もうとしているプロジェクトをまとめ, 9 月 1 日付で作成予定。

6. ニュースレター記事の非会員への執筆依頼について (権藤)

非会員に執筆依頼を行う場合に年度予算内での一定額の謝金の支払いが承認された。

7. 新入会員及び退会者について (本多) ▶13 頁に掲載

資料に基づいて説明があり, 承認された。

8. その他 (加藤→本多)

役員の任期に通算年限による免役措置を設けることについて, 若干の検討をした。

【報告事項】

1. 各委員会報告

(1) 編集委員会 (三村)

『音楽教育実践ジャーナル』vol. 12 no. 1 (8 月 31 日発行) 編集作業の報告がされた。

(2) 国際交流委員会 (水戸)

来年度の国際セミナーの開催の時期, 規模, 開催方法について, および, 会長の訪韓・訪日, 日韓両学会員の大会参加費の減額 (免除) 等について検討中との報告がされた。

(3) 広報委員会 (権藤)

8 月 31 日発行のニュースレター第 57 号の編集作業について報告された。

(4) 音楽文献目録委員会 (木間→本多)

消費税変更に伴う価格表示の変更および音楽文献目録委員会事務局業務等について報告がされた。

2. 第 7 回ワークショップについて (本多)

参加者募集について呼びかけがあると同時に, 今後のあり方についての検討が必要ではないかとの報告があった。

3. 名簿作成について (本多)

本年度 12 月下旬に個人票の送付・確認を行い, 来年度 10 月発行 (発送は 12 月) 予定であること等, 今後のスケジュールと作成, 郵送費用に関する報告が行われた。

4. 各地区の会員 ML 作成について (本多) ▶14 頁も参照

事務局 HP 担当と相談しながら, 今後の可能性を検討することが報告された。

5. 参事について (本多)

今年度は、田中路会員・ツェルゲル会員・塚原健太会員（いずれも東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科博士課程大学院生）に、大会プログラムおよびプロジェクト研究、および、名簿作成にかかわる業務について参事をお願いすることが報告された。

※ 第3回常任理事会 10月24日（金）14:00～15:00（予定） 聖心女子大学
第2回理事会 10月24日（金）15:00～17:00（予定） 聖心女子大学

正会員 新入会員（平成26年5月11日理事会以降）

正会員新入会者34名、正会員申し出退会者3名、正会員自然退会者30名、学生会員自然退会者1名、特別会員自然退会者2名 【2014年7月23日現在 正会員総数：1,527名（承認待ちを含む）特別会員数：1名】

6-2 平成26年度第1回『音楽教育実践ジャーナル』検討委員会

日時：2014年7月6日（日）10:00～12:45

場所：聖心女子大学文学部教育学科音楽室

出席者：今川恭子，奥忍，加藤富美子，永岡都，水戸博道，三村真弓

本委員会では、奥忍委員を委員長に選出、5月1日付で会長より依頼された検討項目について検討した。会長宛の7月8日付報告書には、全ての会員が投稿の権利を有することの確認、採択の公平性を担保する手立てとしての査読の方法に関する一定の方針、他、投稿原稿を増やすための様々な提案が含まれている。

7 事務局より

事務局長 本多 佐保美

1. 第45回大会（聖心女子大学）について

◆総会に欠席される方は、必ず委任状（同封のはがき）に必要な事項をご記入の上、10月10日（金）必着でお送りくださいますよう、お願い致します。

◆今年度の参加申込みは、昨年度に引き続き、原則としてすべてWeb申込みとなっています。下記専用ホームページからお申込みください。

https://amarys-jtb.jp/JMES_SEISHIN45/

◆大会参加費は、以下のとおりです（なお、領収書は当日、受付にてお渡し致します）。

会員 4,000円（事前振込）・4,500円（当日払い）

学生会員 1,000円（事前振込・当日払い）

懇親会費 4,000円

※ホームページからの事前申込み、および入金期日は10月10日（金）です。それ以後は、当日受付にてお申込みください。

※会員以外の方（臨時会員）は、当日受付にて参加申込みをお願いいたします。参加費は両日参加が5,000円、1日のみ参加が3,000円、学部学生は1,000円（両日参加、1日のみ参加とも）です。

2. ホームページが引っ越しました。

本学会ホームページは、このたび、独自ドメインを取得し、下記に引っ越しました。デザインもシンプルで見やすく、美しいホームページとなりました。ぜひ一度のぞいてみてください。

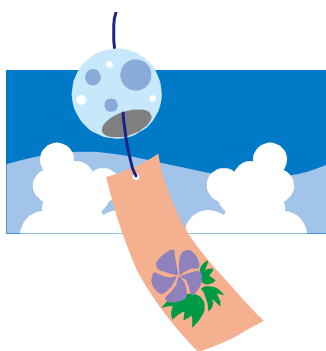
新URL <http://日本音楽教育学会.com> (<http://xn--6oqq31akwh8pa94cx0fi79cv40b.com/>)

3. 正確なメールアドレスの登録をお願いします。

地区例会のお知らせ等をスムーズに行うため、地区ごとの会員メーリングリストを作成することを検討中です。会員の皆様には、正確なメールアドレスの登録をお願い致します。アドレスの変更がありましたら、すみやかに事務局までお申し出ください。

4. バックナンバーの販売について

『音楽教育学』『音楽教育実践ジャーナル』のバックナンバーを販売しております。お得なセット販売も行っております。詳しくはホームページをご覧ください。



◆事務局

・開局時間 月・水・金 9:00~15:00

ご用件はE-mail (onkyoiku@remus.dti.ne.jp)へ

・事務局員

窓口担当：亀山さやか・坂本友里

ホームページ担当：長山弘

【編集後記】

誰が風を見たでしょう 僕もあなたも見やしない

けれど木の葉をふるわせて 風は通りぬけてゆく（第1節のみ）

これはクリスティーナ・ロセッティ（イギリス）の原詩をもとに、西條八十が訳詩した「風」という作品（大正10年発表）です。《夕焼け小焼け》の作曲家として知られている草川信が曲をつけています。「風」は目にはみえません。見えないからこそ、その存在を感じるがあります。ニュースレター「音楽教育の窓」のコーナーは、「さわやかな風がフワッと室内に入ってくるそんな感覚でニュースレターに窓をあけたい・・・」という願いからスタートしました（詳しくは本誌7頁の記事をご覧ください）。「会員の声」のコーナーでは、北海道地区の様子をお伝えしています（今後、輪番ですべての地区の様子をお届けします）。一つ一つの情報が、会員の皆様のお役に少しでも立てればと願いつつ、本号をお届けしたいと思います。

（齊藤忠彦）